

空海研究の障壁（上）

—— 惠果和尚碑再論 ——

河 内 昭 圓

年季が満ちて、私は二〇一四年三月をもって関西学院大学非常勤講師の職を辞することになった。相当長い期間お世話になったように思う。何年からのこの大学での授業を始めたか記憶が曖昧なので、先日事務の方に尋ねたところ、一九九七年四月に最初の授業をしたそうである。今年で十七年ということになる。

奇妙なもので、非常勤講師という立場であるが、これほどの年月になると愛着というものが身について、いざ別れるとなると、なにか寂しい感情が湧いてくる。毎年毎年、関西学院大学日本文学会がお出しになっている雑誌「日本文学研究」への投稿を希望するかどうかを尋ねていただいていた。私自身は発表する場を持っており、場にふさわしくない異質なものを書いて迷惑をかけてもいけないという思いもあつて、これまではお尋ねに応えることもなくうち過ごしていた。今年もまた案内いただいた時にふと、最後ということであれば、この大学でお世話になっていたということの証しになにか書き残しておきたいという気持ちになった。それで今回は投稿を希望するむねを返事した次第である。

そうはいっても、もう年が年なので、画期的な、意欲あふれる新しい研究成果を発表するというような体力と気力がない。私がこれまでしてきたことの一部を回顧的に紹介させていただくということでご容赦願いたいと思う。

もつとも、大学院における私の授業は、おおむねその時おりおりの私自身が抱いている研究課題を、教室で講ずるといふ形態をとっていた。発声してみても自分がいわんとすることを確認する。口に出してみても鬱々とした気分を発散して迷いを払拭する。聴講する者はその時の苦悩とか気力とかを受け止めてくれるはずだという気持ちで授業を展開してきたので、本稿はそのような授業の一部を公開するものであると受け止めていただければありがたい。

大谷大学図書館には、古くから「三教指帰注集」と題する古い写本があった。真宗史学の研究者で山田文昭という偉い先生が所蔵されていたもので、貴重な古抄本であるということとは分かっていたが、それがどういふ性格を持つものであるかについては誰も知らなかった。私が助手であった頃、一九六九年頃であったと記憶する。私にその本の研究を勧める人があったが、その時は日本全国どこにでもあった学園紛争にまぎれて、はなしはそのまま立ち消えになってしまっていた。

一九八三年すなわち昭和五十八年三月、私の指導学生で大学院への進学を志す佐藤義寛君に、この「三教指帰注集」の研究を当面の課題とするよう奨め、金沢本「白氏文集」など古抄本読解に精通された花房英樹先生に直接の指導を懇請した。爾來七年の歳月を費やして大冊『三教指帰注集の研究』は完成を見たのである。佐藤氏最大の業績であった。

佐藤氏の研究によれば、大谷本「三教指帰注集」は、寛治二年（一〇八八）に成安が撰し、長承二年（一一三三）に嚴寛なる僧が書写した古抄本である。加えて、『三教指帰』に関する古注のうち、すでに逸してこの世に存在しない

とまでいわれていた「成安注」の完本であった。さらに年代でいえば、『三教指帰』本文の写本という点においても、これまで最古とされてきた仁平四年（一一五四）証円書写になるいわゆる仁平本をも上まわる善本である。性格が明らかになるや、該書はたちまち重要文化財に指定された。

『三教指帰』といえば空海、空海といえは『三教指帰』、これまでいつたいどほどの人がそれを口にし、筆に染めてきたことであろう。『三教指帰注集の研究』に大谷大学学長として序文を寄せた寺川俊昭氏も次のようにいう。

『三教指帰』は、弘法大師空海（七七四―八三五）の撰述になるもので、仏教・儒教・道教の三教を対比して、仏教のすぐれていることを述べ、弘法大師の出家宣言の書ともいわれているものである。宗教的寓意小説ともみることができ、文章は華麗であって、撰述以降、多くの人がびとに愛読されてきた書物のひとつである。

これが長く広く一般に浸透していた『三教指帰』に対する認識であった。常識であった。はじめ、私もまたそれを共有する者であったが、ふと思いがたることがあった。

空海には別に「于時平朝御宇聖帝瑞号延暦十六年（七九七）窮月始日」という年記を持つ真筆本『聾瞽指帰』二巻があり、高野山に延々と秘蔵され続けてこんにちに至っている。延暦十六年は、空海二十四歳にあたる。恐らくは宗門の事情によるかと思うが、これは長期にわたって門外不出、近現代に至ってようやくその全容が明らかになるが、なにぶん真筆本なるがゆえに、おおむねは書法上の観点から捉えられるきらいがあった。昭和四〇年七月に刊行された平凡社『書道全集』第一一巻で神田喜一郎先生はこれを解説して次のようにいう。

空海は天性生れながらにして書法にすぐれていた。それを如実に証明するのは、いま高野山に蔵する聳誓指帰である。この聳誓指帰は、空海の著書として名高い三教指帰の初稿本にあたるもので、空海の青年時代、すなわち二十四歳の時の筆跡であろうといわれている。これは聳誓指帰の序文の末に延暦十六年の日付があることに拠るのであるが、この日付は著述の年月であつて、果たしてその時に手写せられたものか否かは、なお研究の余地があるうと思ふ。何故ならばその書に少しも文字の改削や書損のところがなく、いったん完成した草稿を浄写したのらしく想われるからである。しかし、聳誓指帰という書名は、まもなく三教指帰と改められたのであるから、これが延暦十六年の書か否かは問題であるとしても、ともかく空海の青年時代の書であることは疑なからう。

『聳誓指帰』と『三教指帰』が持つ瑣末で煩瑣な問題にとらわれない、往昔大家の文章である。

しかし、私のような小人はその瑣末煩瑣にとらわれる。『三教指帰』は『聳誓指帰』と同じ日付をもつて、もつともそこには「于時延暦十六年臘月之一日也」と記すのであるが、空海自身が再治したものと理解されてきた。再治とは初稿本よりも一層良好に書き改めるといふことであるから、再治本が重用されるのは当然ながら、それではなぜその重用されるべき書の写本が、大谷本「三教指帰注集」をもつて最古とするか。空海の再治から約三百年ものあいだこの書はどう扱われていたのか。佐藤氏の研究は、私に単純素朴な問題を提起した。

両書を比較してみると、全体を占める本文の大半はほぼ両書共通するが、巻頭の「序文」と巻末の「十韻詩」が全面的に書き改められていて、その相違点は歴然として分明である。『聳誓指帰』の「序文」は、梁・陳の作者も驚くかと思わせるほどの四六駢儷文を用いて、中国の文学論を述べる。本文は漢代におこり、六朝時代に盛行した「賦」の問答体になつて儒道仏の優劣論を展開し、華麗な駢体で仏教最勝を説くのであるから、文学論に終始する序文は、あたかも以下の論述における文章表現能力を誇示するかの観を呈する。これに対して『三教指帰』の「序文」は、歴

史文のごとく散文的であり、内容は自叙伝に等しく、いうところの「和習」をにじませる。

文章を締めくくる『聾瞽指帰』の「十韻詩」は、その直前の文に仮名を乞（仏教）の議論に感服した龜毛公（儒教）と虚亡隠士（道教）が改宗を誓って教誨を乞い、己の皮膚を紙とし、骨で筆を造り、血を墨にかえ、髑髏を硯にして教えを書きとどめたいといわせて導入部とし、そうしてのちに儒・道・二教を退けて仏教の最勝を説く五言十韻二十句を綴って一篇を終える。一方、『三教指帰』の「十韻詩」は、わずかに文字の異同があるものと同じ導入部を用いながら、内容は仏教優位を説くとはいえず、儒教と道教の有意義有効性を詠じて三教共存に変わっている。韻文としても字句の配置に不満が残る。

両書を読み比べて得た結果は、岩波書店「日本古典文学大系」七一に収載され、つとに「華麗な美文」として評価されてきた『三教指帰』は、じつは『聾瞽指帰』の当該部なのであって、改作された『三教指帰』自体はその評価に該当しないという事実の判明であった。これを要するに、空海自身が再治したという時から大谷本「三教指帰注集」に至る約三百年の空白を埋めることは、『三教指帰』を偽撰と判するよりほかに方法はないということである。

かくして私は一九九四年、平成六年三月、「大谷大學研究年報」第四十五集に「『三教指帰』偽撰説の提示」を発表した。右に記した事柄を内容とする。私としては一つの文学作品に関わる謎解きを試みたものであるが、ことが『三教指帰』であるだけに少しく葛藤するところがあった。

抜き刷りを届けた多くの人から賛意を得た。なかでも福永光司氏から、序文に対する文体の証明の方法に苦言が呈されてはいたものの、偽撰説には賛成するとの信書を頂いたことに葛藤は慰撫された。福永氏には『三教指帰』の訳注（一九八三年 中央公論社「最澄 空海」所収）があり、その解説で『聾瞽指帰』と『三教指帰』の「序文」を比較し、後次的に改作された『三教指帰』の妥当性を論じておられたのであるから、この部分の私の論述に苦言があつて

しかるべきところであったが、「『三教指帰』は」空海がその生存中のある時期にみずから筆を加えたものであることは確実である」（前掲書五七頁）と断言されていただけに、偽撰説に賛意を表された意義は大きい。私の意識の中で、『三教指帰』の偽撰説は確定した。

偽撰説に対する公的な反応は、思いのほか早く現われた。

まず、太田次男氏「『聲磬指帰』と『三教指帰』との本文吟味（上）」（『成田山仏教研究所紀要』一七号 一九九四年九月）が発表された。聞くとところによると、氏は四〇〇倍に拡大する特殊なルーペを用いて毛筆のかすれや磨耗を見出して一字一字を確認し、紙の繊維までも分析して古抄本を解析する専門家で、金沢本『白氏文集』や『聲磬指帰』、『三教指帰』などに関わる古い写本の翻刻及び諸本との校勘に業績の大きな人である。当論文は『聲磬指帰』と『三教指帰』全文の異同を抽出してこれを報告するものである。『三教指帰』で改作された部分にも言及し、総じてこれを好意的に受け止め、空海再治の立場をとる。公表は私のそれとの間がわずかに六ヶ月であり、そのような短期間になしうる内容でない。数年はかけた作業かと思われるが、その「註」に「最近、大谷大学の河内昭円教授より同大学紀要登載の玉稿を頂戴した。その内容は三教指帰の撰者に対する別人説の検討であり、外にも同趣旨らしき論者もある由。次号でこれに対する私見を述べるつもりである」とあるから、拙論を得て発表の時期を早められたものようである。

次いで、米田弘仁氏に「『聲磬指帰』『三教指帰』研究と諸問題」（『密教文化』一九三号 一九九六年一月）が出現、引き続き同氏の「『三教指帰』の真偽問題」（『密教文化』一九四号 一九九六年三月）が発表された。前者は明治からその時点に至る両書の研究状況を整理分類し、各研究者の考察を概観、最後に「この論文目録は、明治三十一年から平成六年まで発表された『聲磬指帰』と『三教指帰』に関する研究論文、活字翻刻、和訳、外国語訳を収録した」と凡例

に示し、拙稿と太田氏前掲論文に至る計一六〇点におよぶ関係論著の目録を付している。後者はみずから「(略)本稿は(前稿の)その続篇である」と述べるように、両論文は連続した関係にある。米田氏は過去にもあった偽撰説二点を紹介してこれに厳正な批判をなし、拙論に対しては、偽撰とする根拠を五条に整理して一条に反対し、残る四条にはおおむね賛意を表明した。加えてみずから偽撰とする根拠三条を提示するのであって、氏の論は偽撰説に帰すると考えられる。

太田次男氏の「東寺宝菩提院三密蔵 三教勘注抄卷五「鎌倉初」写本について」(『成田山仏教研究所紀要』二二号一九九九年三月)は、藤原敦光(一〇六三—一四四)が『三教指帰』に注をほどこしたいわゆる「三教勘注抄」の残巻巻五を調査して翻刻するものであるが、依然空海再治説を念頭においた論をなし、文末に「以上のことを考慮に入れば、本文上からは、『聾瞽指帰』と共に『三教指帰』の撰者として、空海を、後者にのみ該当者とせず、別人を当てることは無理という外はない」と述べ、「別人を当てること」に注して拙論を挙げた。婉曲に拙小論に反対しているわけで、これは前掲『聾瞽指帰』と『三教指帰』との本文吟味(上)には「下」がないので、先に「(偽撰説の)その内容は三教指帰の撰者に対する別人説の検討であり、(略)次号でこれに対する私見を述べるつもりである」としたことへの回答であった。

大柴慎一郎氏の「『三教指帰』真作説」(『密教文化』二〇四号 二〇〇〇年三月)は、太田氏の再治説堅持の立場と右記のような批判に力を得て、拙前稿が「序文」と「十韻詩」を中心とした結構で、本文は多少の異同があってもほぼ同文とする一般の風潮を踏襲して本文全体に配慮しなかつた過失を指摘している。すなわち太田氏が本文全体の異同を検討し、『三教指帰』の改作部の方が良いとした部分に乗り、韻字などへの配慮を加えて空海再治説の展開を試みたものである。要するに私の偽撰説に対する五年越しの反撃であった。

じつは私は、右のような拙偽撰説に対する反応を全くといていいほどに意識しないで過ごしていた。二〇〇四年、平成十六年三月に現役を退任するまでの十年間は、研究会を組織して唐代高僧の碑文を読むことに精励していたし、退任後は、幕末から明治にかけて生きた真宗東本願寺派の僧平野五岳の漢詩読解に追われていた。五岳は九州日田の出身で、詩書画に長じて三絶僧と称された。画は文人画、詩は千五百首ばかりある。それだけではさして面白くないが、松方正義、西郷隆盛、大久保利通らと親交があり、大久保利通の密命を受けて明治九年十一月から十二月にかけて鹿児島に潜伏、西郷南洲説得の任にあたった。この時間ぎりぎりのところで西郷説得の最後の使者となった点が面白い。五岳は後に会談時の西郷隆盛の肖像を描き、わたくしがこれを発見して一時に話題となったことがある。南洲に贈った詩も相当数あるが、これを正確に読める人がいない。そこで地元の依頼をうけて五岳詩読解に没頭していたのである。これがその時の本業であった。

『平野五岳詩選訳注』（日田専念寺・朋友書店 二〇一〇年一〇月）の刊行を終えた頃であった。あたかも時を得たように、比較書像学を首唱する飯島太千雄氏から誘いがあった。飯島氏は偽撰説に対する反論の所在を示し、反論がある以上これに応えるべきだと勸奨した。先に述べた太田次男、米田弘仁、大柴慎一郎各氏の論文は、このとき飯島氏の教示を受けて初めて読んだのである。

飯島太千雄氏は、『空海大字典』二巻（講談社 一九八三年）を初めとして、王羲之、顔真卿などの漢字から良寛にいたるまで、和漢の書影を整理して字典類約三十点を刊行し、これらの刊行に関連する事象を論文にする執筆活動もさわめて旺盛な人である。最近にも『最澄墨寶大字典』（木耳社 二〇一三年四月）を上梓された。

私は、『三教指帰』の済暹偽撰説を主題にして共同研究としてはどうかという提案を受け入れ、私は文章論的立場から、飯島氏は書像学的立場から、仁和寺の学僧済暹（二〇二五—一一一五）を偽撰の作者に想定して論文作成にとり

かかった。

共同研究「三教指帰」の文章論的比較書像学的研究—済暹偽撰説—」が成ったのは、二〇一二年、平成二十四年三月で、「大谷大学研究年報」第六十四集誌上に公表された。各自に論題があり、河内昭圓「三教指帰」本文の文章—済暹偽撰説—、飯島太千雄「三教指帰」済暹偽撰説」となっている。

飯島氏の手法は、膨大な書像資料からそれぞれが持つ特徴はもとより、筆の入れ方、偏と旁の使い方や姿、略体字や異体字の使い分けその他諸々の視点から、個ないし時代の推移を多くの写真を示して検証し、済暹あるいはその時代を特定して済暹の偽撰を証明する。

私は、太田氏や大柴氏の議論にとらわれず、したがってそれらの意見に対する反論などという意識を持たず、前稿の足らざるを補完する立場から本文全体を独自に調査し、改変部を抽出してその是非を論じた。項目を立てていう。一、適不適の改変。二、平易にする改変。三、改作のための改変と多字改変。四、対句と韻字に関わる改変。五、助字に関わる改変。六、済暹偽撰説の提示。

これを要するに、改変が適当と思われるものはきわめて少なく、おびただしい数の改変部の大半は適正を欠く。なかでも対句や韻字、さらに助字に関する問題は、漢文の読解能力が問われることがらで、空海が許さない事項である。すでに公表したものであるが、一二を例示して以下に示しておく。

(聲瞥指帰) 食百味而婀娜鳳體。徒爲犬鳥屎便。装千彩而嬋媛龍形。燎火之中燒燃。

(三教指帰) 食百味而婀娜鳳體。徒爲犬鳥之屎尿。装千彩而嬋媛龍形。空作燎火之所燃。

「仮名乞見論」にある「無常の賦」といわれる部分の一節である。原作は八字句六字句の隔句対で構成されている。「三教指帰」は、「便」字を「尿」に、「燒」字を「所」に改めた。さらに「之」字と「空」「作」の三字を加入して八

字句七字句の対句に作り直している。ここに見る形態での七字句というのも奇妙であるが、おそらくは原作「療火之中燒燃」の対応として「徒爲犬鳥屎便」に「之」を加え、七字句になったので隔句を「空作療火之所燃」の七字に作り直したということであろう。それはまだ許容の範囲としても、許しがたいのは「便」字を「尿」に改変したことがある。ここでもまた改作者の致命的な欠点^レが露出する。ここに示した句では「便」と「燃」が韻字であって、これを配慮しない改変は空海の許すところでない。

（聾瞽指帰） 水漿之名。億劫何聞梅。咳唾之澆。萬歲不得擅。

（三教指帰） 水漿之食。億劫何聞稱。咳唾之澆。萬歲不得擅。

右に同じく「仮名乞児論」の「無常の賦」の一節で、地獄の苦しみを説くくだりである。「梅」字を「稱」字に改めた。大失態である。「梅」は、梅檀の梅であるが、音「セン」は「之焉」の二字を詰めたもの。つまり「億劫何聞梅」は「億劫何聞之焉」（億劫も何ぞ之を聞かんや）と同義であって、「億劫も何ぞ梅を聞かんや」と訓じるのがよい。改作者はこの「之焉」の義を承知していなかったとみえる。やや字形の似る「稱」字に改めて「何ぞ稱を聞かんや」と訓じた。原義を失うと同時に、この字の置かれる位置が押韻しなければならぬ箇所であることも失念してしまっている。「梅」は韻字で、下の句の「擅」字と対応する関係にあるのである。「稱」字にしてよい道理がない。

（聾瞽指帰） 咨見與不見。愚與不愚。

（三教指帰） 咨乎見與不見。愚與不愚。

「仮名乞児論」の一節。「咨」は、嘆きの詞で、ああ。『文選』二〇曹植の「責躬詩」に「ああ、我小子」（咨我小子）とあるように、一字で表記するのが通常の使用例。『聾瞽指帰』の中でも幾度も使用されている。「乎」字を加えて六字句に整えたかと思われるが、不要の改変^レというべきで、「咨乎」の用例検索は困難をきわめる。

(聲擘指婦) 豈不盛哉。不復快乎。

(三教指婦) 豈不盛哉。復不快乎。

「鬻毛先生論」の一節。兎角公が鬻毛先生の字識徳行を賞賛し感嘆するくだりである。「復」字と「不」字を顛倒させて上句の「豈不」と同じ配置とし、もつて対句の形式を整えたつもりでいると考えられるが、改作者の語法能力を疑わしめる大きな改変である。二句はともに反語の語法を用いて、強い詠嘆の意を表現する。「豈」字は反語の助字で文頭に位置し、「哉」字と呼応して反語文を形成する。かくして「豈不○哉」はきまつて詠嘆となる。一方、「復」字はそれ自体が反語詠嘆の意を持つものではない。『論語』冒頭述而篇に見える「不亦説乎」と同じく、「不復○乎」と措辞されてはじめて詠嘆の句となりうる。「復不○乎」の文形では「乎」字は単なる疑問の終尾詞となつてしまふのである。

「不復」と「復不」の違いは、漢文法の基本的な問題である。

(聲擘指婦) 豈不辱乎。不亦哀哉。

(三教指婦) 豈不辱乎。亦不哀哉。

「鬻毛先生論」の一節。鬻毛先生が兎角公の請いに応じて人間の愚かさを論じたくだりである。右と同じく詠嘆の構文である。

先の「不復快乎」も「不亦哀哉」も訓読して日本語になおすと、「復不快乎」「亦不哀哉」とまったく区別のつかない同じ読み方となる。訓読法が持つ欠陥の一つである。もつとも、古人がもし考試において「復た快ならずや」「亦た哀しからずや」の復文を命じられれば、ことごとく「不復快乎」「不亦哀哉」と応じたであろう。ここはもちろん先の「復不快乎」と同様間違つた語法理解による対句を意識した改変で、誤写などというものではない。

いま、改作者が済暹と思わせる事例を一つ挙げておく。

（聾瞽指帰） 橡飯茶茶菜。一句不給。千結葛襪。二肩不弊。

（三教指帰） 橡飯茶茶菜。一句不給。紙袍葛襪。二肩不弊。

「仮名乞児論」の一節。仏教を代表する仮名乞児が、質素な食事と衣服を生活信条とすることを説くくだりである。「千結」を「紙袍」に改めた。「千結」は、「百結」を空海流に誇張した表現。百結は、『法苑珠林』五六に「身に百結の縷を披り、郷里に既に田宅無し」（身被百結之縷。郷里既無田宅）とあり、『芸文類聚』八五布帛部が引く庾信の「趙王の白羅の袍袴を賣るを謝するの啓」（謝趙王賣白羅袍袴啓）に「千金の暫暖を披り、百結の長寒を棄つ」（披千金之暫暖。棄百結之長寒）とあるように、用例検索にこと欠かない語で、幾種ものぼろ衣を綴って作った衣服、あるいは継ぎはぎだらけの衣服、要するに貧する者が着る弊衣をいう。

「紙袍」は、古い用例を見ない語で、あるいはここでの使用を最古の例と考えてよいであろう。ただその意は、字意からして紙子とも書く紙衣を指すことは容易に察しがつく。いまでは甚だ高級な衣服とも考えうるが、元来は貧者や僧が着する弊衣であった。したがって「千結」から「紙袍」への改変は原作の文意を壊さず妙を得ているかに見えるが、これこそじつは改作者痛恨の大失策であった。紙衣は空海の時代に存在しなかったからである。紙袍が漢籍に用例を見ないのも道理というもので、紙子は強靱な和紙にしてはじめて成る日本固有の文化なのである。

空海の時代、紙は官製の院紙できわめて希少、主として公文書あるいは写経等に供される貴重品であった。衣服の代用とする弊衣などに使用する物ではあり得ない。これが大量に生産され、したがって弊衣ともなりうるのは少なくとも平安中期以降のことである。十世紀になって各地に展開する荘園が経済的社会的に大きさを増し、荘園主はその経営に腐心しなければならぬ事態におちいった。かくして経済を補う一端として紙漉き職人が各地に養成され、紙

の大量生産が始まった。生産量が増えた和紙は、楮、雁皮、それにやや遅れて三椶などを原材料とし、とろろあおいの根や、のりうつぎの樹皮から抽出した「ねり」といわれる粘剤を混ぜて繊維をつなぐ。極めて良質強靱、ついには書き損じた紙を利用して僧などが紙衣にして暖を取るにいたり、やがては一般にも普及して織物を入手し難い貧者がこれを用いるようになった。

このように紙の歴史を概観すれば、「千結」を「紙袍」に改作し得る人は明らかに平安中期以降の人物であり、済暹こそがそれに該当すると考えざるをえないのである。

空海は大きい。平安初期に嵯峨帝の信任を得て国家護持に貢献があったこともさることながら、その後に展開された宗教的、書法的、文学的事跡の数々が、こんにちの社会にあたえた影響の絶大さは計り知れない。なおかつひとたびこれを信仰という立場に立脚して見るならば、廣大無辺の広がりと深さを現す。日本の歴史を通観するとき、これほどに名声を博し、これほどに周知された人物は他に類例をみない。

『三教指帰』は、歴史的にといつてよい長い時間のなかでその大きさを象徴する書物の一つであったので、それを偽撰とするについては強い抵抗があるかと思う。しかし、上記拙論二種ならびに書像学の見地から実証的に論じた飯島太千雄氏論文が、部分的に誤りを犯しているであろう箇所を指摘されることがあっても、偽撰説それ自体を覆すことは困難である。したがって時間を要するかと思うが、やがてその説は定着するに違いない。

『三教指帰』においてさえそうであるから、空海研究の最大の障壁は、対象とする事柄のテキストが定まらないというところにある。中国の事情と異なって、日本には紙に書かれた写本、古抄本が驚くほど大量に残っている。同じ対象物にしても、時代を異にして多く残っている。文学研究においては異本が存在するのは普通であるから、これら

異本との校勘作業は当然必要なことであるが、残存する紙が多いので校勘作業自体に多くの時間と労力を割かなければならない。しかもそれら古抄本は大抵の場合由緒ある寺院や博物館はたまた大学図書館などに秘蔵されており、これに接する機会は限定されている。加えて古抄本には真偽問題がつきまとう。空海の場合、真筆本とされるものが相当量あるから、それが存するかぎり安心できるかという、そういうわけにもいかない。真筆と称されるものには常に真贋問題があるからである。たとえば空海の述作とされるもの一つに「真言付法伝」がある。これについては後に述べるが、空海が真言を伝える七人の祖師の伝記を記したもので、そのうち第七祖は、空海が入唐中に真言の秘法を伝授された恵果という高僧であるが、その伝記を含む「真言付法伝」の真偽問題を論じて、これを偽撰と断じた人がある。ところが空海には別に東寺が所蔵する国宝「真言七祖像賛」があり、空海が唐から持ち帰ったものを含む七祖の絵像、名号、題賛、行状が書かれている。空海以来のものであるので傷みがひどいが、その残影を少しでも解明しようとする努力が早くから行なわれていた。その間、例によって真贋論争も盛んであったが、中田勇次郎、佐和隆研、飯島大千雄氏ら仏教美術や書法学の専門家によって、真作であることが確定している。問題はここにある。「行状」文である。行状は絵像下部に別途貼り付けられた形状にあり、すべて剥落しているもの、なかば書影が残っているもの、相当良好を保っているものがある。その残された書影を読み解くと、別に伝わる「真言付法伝」とほぼ一致することが分かっている。「真言付法伝」が先行するか、「真言七祖像賛」に記された行状文がこれに先立つかはなお議論の余地をのこすが、ともあれ「真言七祖像賛」行状文の剥落した部分は「真言付法伝」によって補填して釈文されているのが現状である。この状況をふまえていうならば、「真言七祖像賛」に記された行状は空海の本筆であり、その文章は「真言付法伝」と同一であるから、「真言付法伝」を偽撰と断言すると、はなはだ不都合が生じるということになるのである。

私が『三教指帰』偽撰説余論―惠果和尚碑に関する二三の問題―を書いたのは、二〇一三年、平成二十五年三月「文藝論叢」第八〇号誌上であった。前年の二〇一二年六月、前出『三教指帰注集の研究』を著わした佐藤義寛氏が病を得て他界した。享年五十三歳。周辺の人たちがこれを惜しんで、次回「文藝論叢」第八〇号は佐藤義寛教授追悼記念号にするという。それでは私も何か書かねばならんということになって、筆を執ったのが右の小論である。

「惠果和尚碑」、正確にいう「大唐神都青龍寺故三朝国師灌頂阿闍梨惠果和尚之碑」は、真言七祖に目される青龍寺惠果（七四六―八〇五）の碑文で、空海が撰したとされ、『性霊集』、詳細には『遍照發揮性霊集』巻二がこれを収める。かつて京都学派の重鎮桑原隲藏がこれを絶賛して次のように述べた。

惠果示寂の後ち、大師はこの恩師の為に碑文を作られた。『性霊集』巻二に収めてある、大唐神都青龍寺故三朝国師灌頂阿闍梨惠果和尚之碑がそれである。一体大師の文章は、時代の風尚を受けた四六駢儷体で、この碑文も勿論同様であるが、今日伝はれる大師の文章の中で、尤も傑出したものの一つであらう。これは文学隆盛の支那の本場で、一外国の沙門の身を以て、名譽ある文章を作るといふので、随分苦心された故もあらうが、同時に衷心から恩師に対する思慕景仰の念の深厚なる故と思ふ。

大正十年（一九二一）六月十五日に開催された弘法大師降誕記念会での講演録である。「大師の入唐」と題し、『桑原隲藏全集』（岩波書店 一九六八年）巻一がこれを収載する。桑原の文章は、空海当時における渡海の制度、困難、長安の状況などを、日中の歴史書を初めとする諸文献、さらに空海の「大使の為に福州觀察使に与うるの書」（『性霊集』巻五）を用いて説明、綿密にして重厚である。

美文である。惠果の死に際して、格別の授法を受けた空海は、並み居る弟子をさしおいて名譽の碑文を書いた。こ

れは、歴史的に伝承されてきた有名なはなしである。桑原隲藏も些細なことにこだわることなく、伝統という史実にしたがったのであった。聴衆は意を得て満足したのであろう。

私がある時期、唐代高僧の碑文読解に精励していたことは先にも述べた。十年は読み続けたのであるから、高僧碑文の解読は薫習ともいうべく、身についた習性であった。「『三教指帰』本文の文章―濟暹偽撰説―」の原稿執筆途次にもかの成安がしばしば『性靈集』を引用して注文に当てることから、そのたびに『性靈集』を紐解いたが、その際「惠果和尚碑」に目が転ずるのは自然のなりゆきであった。美文ではあるが、直感的に違和感を抱いていた。前稿副題にいう「―惠果和尚碑に関する二三の問題―」は、その違和感を短文にしたものである。しかし、結果はテキスト問題に困惑して結論を曖昧にしまった。失敗である。ここに再論におよぶのは、そのような経緯による。

（以下次号）

（かわち　しょうえん・大谷大学名誉教授）